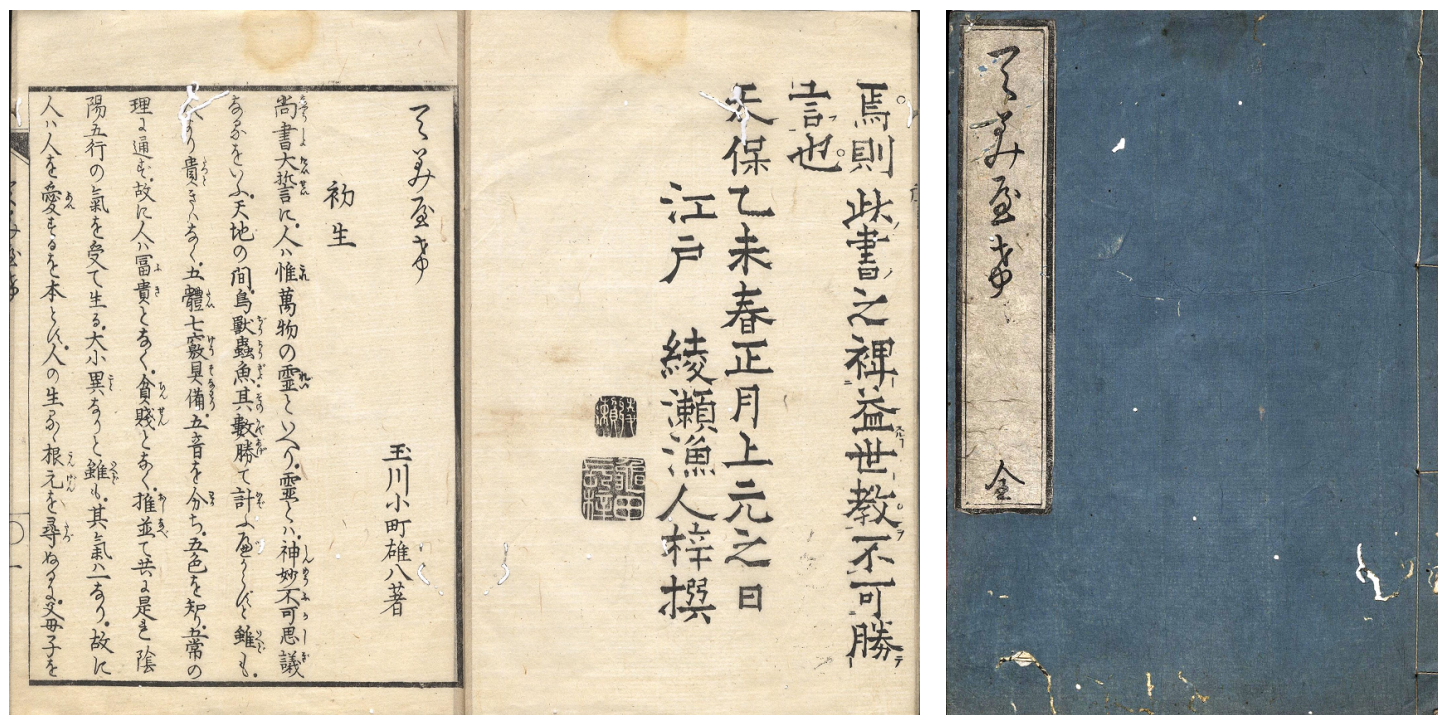


【読楽】024 「てみやげ」を読む \*読楽箇所=本文冒頭



【概要】

てみやげ

【書名】 書名は原題簽による。首題・柱題・尾題「天美屋希」。

【書型】 半紙本一冊。天地二二七耗。

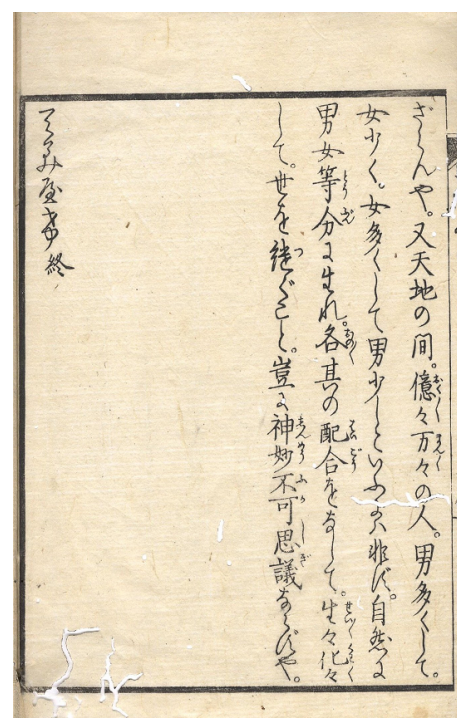
【作者】 小町玉川(雄八)作。

【年代】 天保5年(1834)11月、山崎嘉輔跋。天保6年1月、亀田綾瀬序。天保6年1月、加瀬良長(蟻齋)・千葉知止(椒堂)跋・刊。刊行者不明。

【内容】 「初生」「十有五(志学)」「三十(而立)」「四十(不惑)」「五十(知命)」「六十(耳順)」「七十(従心)」「無疆」「性善」「天地正大」の10章に分けて人生七十年の計や人間本来の生き方を論じた教訓書。

「初生」は年代別教育論などの教育論で幼児教育の基本を縷々述べる。正直・温和・丁寧な言葉遣いなど他の育児書と共通する内容とともに、子供同士での喧嘩で我が子を最良しないことや、子供に人の死と向き合わせる大切さを説くのは独特であり、さらに、育児の要諦を童子教育の7カ条(①古人の善行を語り聞かせる、②行状の慎みや年長者への礼、③嘘偽りの禁止、④親の丁寧な言葉遣い、⑤まず誉め、後に叱る、⑥友達を選ぶ、⑦経書(最低でも『孝経』1巻)の素読)にまとめる。

「十有五」以下は各年代における指針や心得を示したもので、論語に説く志学・而立・不惑・知命・耳順・従心の意義を論ず。「無疆」は長寿・天寿の視点からの心得、「性善」は孟子の性善説に基づく人間観や人間が不善をなす道理、悪を憎む人間の心について解き明かし、さらに「天地正大」では天地の動きが暦と寸分の狂いもないように、天地自然の理が不変であること、この道理に即した人間の生き方が「正直を本とし、父母に事え、邪欲を貪らないこと」であること天地の間に等分の男女が生まれ、世を継いでいく不可思議さなどを述べる。



## [各章要旨]

### ○初生

人は陰陽五行の気を受けて生まれる。人を愛するのが人の根本。人間が意図的に子を産むのではなく、「無心のうちに妙合を得て親となり子となる大善縁。我が子を我が子とせずして大切に養育すべし。子供は天からの授かりものと感謝し、大切に子供を育てよ。罪を憎んで人を憎まず。心は私欲に引かれて罪を犯すが、罪を憎んでも、その人の体を憎むべきではない。人体は天の造作であって憎んではならない。刑罰は国法に従って執行するが、一人を刑して万人を戒める。

養育の第一は乳汁に在り。小児に灸をする(灸の据え方)。物心が付く5-6歳からの教育が大切。この時期の見聞が心の本体となるため、子供に嘘をつかず常に正直に話す。また、溫柔にして誉める。小児を喚ぶ時に丁寧な言葉遣いを心掛け、不遜な言葉を控える。日頃は子供の機嫌を取って取り扱っても、不孝や不忠に近い行いがあれば、放任することなく厳しく教えよ。

子供同士の喧嘩では我が子を鼻肩してはならない。このような場面で鼻肩をすることは子供の害となる。喧嘩の是非に拘わらず、まず我が子を叱るべし。「小児の時より漸々に養ひて、堅強き氣象を変化して柔弱の氣象と」することは、子供の「一生の福分」となる。

#### \* 子供が「死」と向き合う大切さ

人の死を子供に見せるのは不浄で忌むべきで、亡霊の祟りがあるなどと言う人がいる。しかし、死・生は一つである。生まれれば喜び、死ねば悲しむ。死生は人の大事で、どうしてこれを<sup>ゆるが</sup> 忍せにできようか。死を遠ざけることは、不実・薄情を教えるようなものだ。

#### \* 童子を教育する7カ条

- (1) 古人の善行を常々語り聞かせる。
- (2) 行<sup>ぎょうじょう</sup> 状をよく慎ませ、父兄・長者に対しては頭を下げ両手を突いて礼(挨拶)をする。
- (3) 嘘偽りを厳禁とする。
- (4) 親が、賤しい者にも丁寧な言葉遣いで対応する。そうすれば、子供も自然と丁寧を習う。
- (5) まず誉め、叱ることは後にする。誉められることは天性自然に好むので、誉め種(誉める材料)をこしらえてでも誉める。これは善事を勧める手段である。叱ることはよくない。子供は弁えがないので、叱られればさらに根性が悪くなり、心が後戻りしやすい。だから、叱ることは後にし、まず誉めるのである。
- (6) 子供を善導するには、友達の善悪が重要だ。孟母<sup>もうぼ</sup>が、住む環境を選び、友を選んで、孟子を教育したことは、まさに賢母の行いである。
- (7) 経書(儒教の経典)を極力読ませる。極めて賤しい家庭の子でも『孝経』一部は読ませたい。一言半句でも聖賢の語を聞き慣れていれば、いずれは役立つ。年をとっても己<sup>おのれ</sup>一人の了簡では道理に暗く、親の有り難みや主君の大切さも知ることはなく、ついには悪道に陥って身を失う者もいる。世間でも「四書の素読をした者は一生乞食には落ちぬ」と言う。

### ○十有五(志学)

生まれながらに道を知る「生知」は1億万人の中にも1人もなく、いわゆる堯舜の二聖のみである。そのほかは孔子と雖も学問修業によって道を暁るものである。そして誰もが学問によって道に昇進し、心の安寧を得ることができる。孔子は十有五にして学問を志した。その学問の初歩(初学)は、詩書礼楽の書物を素読し、次に会読や講釈を聞き、威儀作法等を学ぶことである。学を志すというのは『大学』でいう「知止(止まるを知る)」であり、君主は至善に止まり(仁に止まる、則ち、慈悲憐愍の心で家来を使う)、臣下は敬に止まり、子は孝に止まり、父は慈に止まり、人を交わるには信に止まるという、仁・敬・孝・慈・信の五箇条は全て学問をしなければ身につけることができない。従って、学問は中道を知る所以である。

#### \* 婚礼の心得

### ○三十(而立)

「三十にして立つ」は、道に立ってたゆまざるの意。富貴利達・淫声美色に心を動かされないことで、真の正直に従って欲すべきものと欲せざるべきものを区別すること。私が考えるには、富貴利達は道理に従って行うべきである。



## ○四十（不惑）

不惑とは、智が明らかで、善悪邪正が厳格に分別できていること。疑惑の心が甚だしいと、ついには心の本居（本拠）を失ってしまう。その惑いの根元は、かりそめの利欲のために己を忘れ、身を失うからである。邪欲は去り、正欲は去ってはならない。邪欲を去ると是非が見える。是非が見えると疑惑がなくなる。正欲と邪欲の二つだが、譬えて言えば、年貢は四公六民、商人は1割から2割半の利益を取って売買するというのが正欲で、これらに反するものが邪欲である。対人関係では、人に対して語るべきでないことを語ったり、暴利を貪って人の難儀を顧みなかったりすることを邪欲という。

## ○五十（知命）

天命を知るは、「天地自然に仰附られたるもの」である。天命を知ることで、吉凶・禍福・死生を究達（きわめ尽すこと）することにより心が動揺しない状態を言う。「死生命あり、富貴天になり」「五十にして易を学ばば以て大いなる過ちなかるべし」と論語にある。天命を易々と心得てはならない。一生人事を尽くしても人事にすら通曉できるものではない。ましてや天命についてはなおさらのことである。人事の大概は、君への忠義、親への孝行、王法を固く守り、上を畏れ、下を憐れみ、早起きして家業を務め、自身は儉約して人を責めず、人との交わりを良くして、他人への仁義や義理を欠く様なことをせず、これに報いることである。

## ○六十（<sup>じしゆん</sup>耳順）

耳に順うとは、人の異見に順って逆らわないことである。己に対する是非・毀誉を聞いて心を動かさないことである。人を治めるには、依怙鼻眞をせず、愛憎の心なく、広い心と<sup>ゆた</sup>胖かな体（態度）が大切であり、小人が人を治めようすると、顔色に愛憎が現れ、音声を聞いて是非を立てるのは私心があるからで、どうして人を治めることができよう。五十までは自己を修める工夫だが、六十からはもっぱら人を治める工夫に務める年代である。

## ○七十（従心）

七十にして心の欲する所に従<sup>のり</sup>えども矩を越えずという。心そのままに行っても万事、礼儀の法を離れないことである。不惑は智者の惑わざるに似たり。知命は仁者の憂えざるに似たり。耳順は勇者の懼れざるに似たり。従心は聖の境地である。以上、智・仁・勇・聖の四徳は、天地と全く同じである。

\* 聖賢の生没年月日

## ○<sup>むきよう</sup>無疆（<sup>むきゆう</sup>限りの無いこと。無窮。無限。永久）

天地が限りないこと。長寿・天寿について。百穀も樹木もその終わりには何かの役に立つが、万物の靈である人がその終わりに役立たずに愚に帰るのは何故かと言えば、正欲を去って邪欲を貪るからである。夫子（孔子）の道を学ばば、匹夫（教養がなく身分が低い人）も身を立て、王公も国を安んずることができよう。

## ○性善

生まれつき天より受けたものを指す。詳しくは、性には三つある。性善は性の心。性の情は、飲食を嗜み、女色を好むこと。性の形は、身の長短、色の黒白など。「人の性は善である」と孟子が言われたように、人に不善はない。人が不善をなすのは性の罪ではなく、その人が邪欲に惹かれて悪をなし、困窮に迫られて道を失うからである。慎みがないからである。善を善とし、悪を悪とするのが天下の人情である。悪を憎む心は善である。天地の間耳目に触れるものは全て善である。

## ○天地正大

天地の動きは1年360日の四時寒暖の変化はあっても、1年の始まりと終わりは暦と寸分の狂いもない。このように不変であるものは天地自然の理である。人間はこの天地の理に従うべきで、自然の理は正直を本とし、父母に事え、邪欲を貪らないことである。天地の間に男女が等分に生まれ、世を継いでいくことは何と不可思議なことであろうか。